

小学校外国語教育における国語・英語・中国語の連携の可能性：ことばへの気づきに着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 林鋒 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10350

小学校外国語教育における国語・英語・中国語の連携の可能性 ～ことばへの気づきに着目して～

福井大学教職大学院 王 林 鋒

本稿は小学校外国語教育の目的を「ことばの教育」として捉える。「ことばの教育」とは、ことばの面白さや豊かさ、不思議さに気づかせ、ことばへの気づきを大切にしたい言語能力の育成である。小学校においては、母語や外国語を対象にことばへの気づきを培い、言語に対して意識的になることで、母語と外国語を効果的な運用を可能にすることが期待される。「ことばの教育」を実現するためには、国語教育と外国語教育の連携が必要となる。本稿では中等教育における国語科と英語科連携のプロジェクトの実践から、小学校外国語教育における国語・英語・中国語を取り入れる連携の必要性和その可能性を探る。

キーワード：小学校外国語、メタ言語能力、ことばへの気づき、ことばの教育

1. はじめに

2017年3月に公表された次期小学校学習指導要領では、教育内容の主な改善事項の一つとして外国語教育の充実が示されている。小学校において、中学年で領域として「外国語活動」が、高学年で教科として「外国語科」が導入される。外国語能力の向上を目指すとともに、国語教育との連携を図り、日本語の特徴や言語の豊かさについて気づく指導を充実させることが掲げられている。同じように、国語科においても、「言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること」(文部科学省2017:158)が提唱されている。従って、小学校言語能力の育成にあたっては、教科横断的な視点から国語と外国語が連携する教育課程の編成を図ることが重要視されている。言語能力の向上を実現するため、教育現場における外国語教育と国語教育との連携を目指した具体的な取り組みの開発が期待されている。そこで、本稿では、筆者が携わってきた中等教育における国語科(現代文・漢文・古文)と英語科連携のプロジェクトの実践を振り返り、得られた示唆に基づき、小学校国語教育と英語教育の連携に中国語を加える必要性和その可能性を探る。

2. 先行研究

2.1. 歴史的な視点から見る国語教育と外国語教育の連携

最初に国語教育と外国語教育の連携の必要性が示された時期は、明治期まで辿ることができる。歴史的観点から榎木(2012、2015、2016a、2016b)は、国語教育と英語教育の連携前史及び連携史を四段階に分けて整理している。

2.1.1 国語・漢文・外国語の「連絡」

まず、明治期から1950年代において、「連絡」の方法としての言語横断的な文法指導の記述が見られた。岡倉(1894)は、外国語教授法の欠点が、国語・漢文との「連

絡」がないことだと指摘した。「連絡」とは、既知の国語・漢文の文法を新しく習う外国語の文法と比較することで、相互に関連した知識体系を作ることである。国語・漢文・外国語といった三科目の「連絡」を実現させようとした岡倉は、教員検定試験について、三科目のうち、どの科目の教員になるのであれば、他の二科目の知識が十分でない場合には教員免許を授与しないよう提言した。この提言から、国語・漢文・外国語三者の密接な関係性が示された。

2.1.2 国語教育と外国語教育の「相補的關係」

さらに、1960年代から70年代において、国語教育と外国語教育の共通理念として、「言語教育」という概念(西尾実・石橋幸太郎1967)が提示された。1967年に、国語教育の専門家と英語教育の専門家の両方が関わり、『言語教育学叢書』(全6巻)が刊行された。その中、言語教育の本質と目的が、国語教育を通して身につけた日本語の知識を生かして外国語教育を行うこと、そして、外国語教育を通して日本語に対する意識を深めること、という「相補的關係」にあると述べられている。そこから、国語教育と外国語教育の関係者は、連携の在り方について論議を重ね、模索し始めた。

2.1.3 二つ以上の言語による「メタ言語能力」の発達

しかし、1980年代から90年代にかけて、「コミュニケーション・アプローチ」(communicative approach)という教授法が流行した影響で、母語の使用を極力排除する傾向が強かった。その時期に逆風として、国語教育と外国語教育の連携の可能性を示唆した「メタ言語能力」の提案が出された。メタ言語能力は、「脳に内蔵している文法知識を客体化して利用することができる能力」(大津1982、1989)と定義されている。この提案の発想は、すべての個別言語を支える共通の基盤が存在し、仕組みや働きといったことばの性質に気づかせ、外国語教育を促進することである。大津は、このメタ言語能力の発達を促進することが国語教育と外国語教育のあるべき中核

的な目標だと主張している。Tunmer and Bowey(1984)は、大津の定義よりメタ言語能力を広義に捉え、メタ認知の低位概念に位置づけ、「音韻への気づき」(phonological awareness)、「単語への気づき」(word awareness)、「文法への気づき」(form awareness)、「運用上の気づき」(pragmatic awareness)の4つの領域によって構成されると述べている。メタ言語能力の育成に関して、大津は、「二つ以上の言語体系が得られている場合には、それらを比較対照することが可能になり、メタ言語能力が発達しやすくなる」と指摘している(1989: 30)。この観点から二つ以上の言語により、メタ言語能力を発達させる示唆を得ることができる。外国語と母語の相違点だけでなく、共通点も意識することにより、メタ言語能力を活性化することができ、相互的に適切な運用能力を育てることにつながる(岡田1998)。

2.1.4 小学校外国語教育における「ことばへの気づき」

2000年以降、小学校英語導入問題の解決案として大津(2004、2005、2006)は、小学校において母語を対象にメタ言語能力を培い、中学校以降の外国語教育の土台とする「言語教育」の構想を提示した。国の方針として教科横断的連携が明示されたのは、2007年に文部科学省が公布した報告書「言語力の育成方策について」である。その中に、言語能力を育成する必要性が認識され、各教科を通して、言語の運用力を育成する方向性が示された。この方策に至ったきっかけは、2003年のOECD PISA調査で「読解力」の順位が低下したことにあると考えられる。その報告書を背景にし、大津(2010)はメタ言語能力の観点から、「ことばへの気づき」を提起し、それは母語と外国語の効果的な運用を可能にすることに繋がると述べている。具体的な取り組みとして、小学校段階で児童の母語を利用して育成しておきたい気づきの対象項目が提案され(大津2012)、実践の展開に大きな助けとなっている。その提案の発展として、文部科学省英語教育の在り方に関する有識者会議(第三回)において、大津(2014)は、なぜTOEIC、TOEFLのスコアが高くても、英語が使える人が少ないか、また、なぜ日本語がきちんと使える人が非常に少ないかという危機感を提起し、その原因が、母語と外国語が関連づけられる「ことば」という観点の決定的欠落にあると指摘した。そして、小学校における外国語活動をことば活動にし、母語も外国語も対象となり、ことばの仕組みや働きへの気づきを意識させる必要性があると改めて強調した。言語力育成の方針は、2016年に公開された中央教育審議会答申に反映され、外国語教育を通じて国語の特徴に気づいたり、国語教育を通じて外国語の特徴に気づいたりすることで、「ことばの働きや仕組み等の言語としての共通性や固有の特徴への気づきを促すことを通じて相乗効果を生み出し、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である」(中央教育審議会2016: 36)と記された。

その方針が次期指導要領の中では、強く打ち出され、実践への期待が高まっている。

2.2 国語教育と外国語教育を連携する実践からの示唆

国語教育と外国語教育の連携の実践は、中学校、高校、大学の授業で見られた(秋田他2014)。具体的には論理的思考能力の育成を共通目標とした国語科と英語科において文や段落の結束性や一貫性に関する共通活動を実施した実践、英語科との連携で論理的思考力や表現力を高める国語の指導並びに国語科との連携で基礎英語力の定着を確立する指導をそれぞれ実施した学校、現代文・漢文・英文の文法の共通点や相違点を基に文法の構造を理解させる指導を行った学校、といった代表的な事例がある(斎藤他2013)。言語横断的な実践は高校に集中している。その理由は、漢文との関連づけや論理的思考力・表現力の育成といった高校生に求められる力が背景にあると考えられる。

このような実践を踏まえて、メタ文法能力の育成に焦点を当てた実践研究プロジェクトが国語科と英語科の教員と大学研究者の協働によって行われた(斎藤他2013、秋田他2013、斎藤他2014、秋田他2014、秋田他2015)。メタ文法能力とは、メタ言語能力を文法に特化した概念であり、ことばの仕組みや規則を意識させる能力として定義されている(斎藤他2012)。言語横断的に働くメタ文法能力の育成を目指した実践は、英語科・国語科それぞれにメタ文法授業をデザインし、その授業展開過程、生徒の事前事後課題ならびに授業中に記した生徒のワークシートにおける感想記述の分析、授業者ならびに担当教科教諭による授業研究協議会を実施することによって、メタ文法授業の可能性を検証した。さらに、実践と教材開発を通して、メタ文法能力育成を目指したカリキュラムを開発した。筆者が携わったこのプロジェクトは、中等教育を対象にした調査及びデザイン授業を行ったが、小学校の外国語教育にも示唆を与える研究結果を三つ紹介したい。

2.2.1 言語横断的なことばの仕組みに対する気づきを促す授業がメタ言語能力を養う

メタ文法能力育成プロジェクトの開始前の事前テストとして、首都圏にある中高一貫校の中学1年から高校2年までの生徒565名(1学年3クラスで5学年)を対象に、課題テストが行われた(2012年3月実施)。課題テストの目的は、すべての言語に共通することばの仕組みや働きを意識させる能力を調べることである。調査対象者の既知知識を配慮し、国語科と英語科において共通して具体的に捉えられる項目として、品詞の概念・修飾関係・係り受けに焦点をあて作成された。国語文法問題、英語文法問題、メタ文法問題(国語・英語共通)の選択肢問題、及びメタ文法問題の自由記述問題で構成された(秋田他2013)。その後、高校2年生(3クラス)を対象に、メタ文法育成を目指したデザイン授業(50分)を英語科(2012年5月)と国語科(2012年6月)それぞれに実施し

た。英語科では、「係り受け」をテーマに英語と日本語の修飾・被修飾の構造を比較した。国語科では、「否定」をテーマに漢文と英語の部分否定、全否定の構造を比較した。事後課題テストは、2012年7月に高校2年生3クラスの生徒115名を対象に行われた。事後テストの課題は、基本的に事前テストの構造や難易度に相当する問題が使用された。事後テストの自由記述問題は、あえて異なる問題にし、デザイン授業で扱われた漢文と英語を関連させた問題を追加した。

全体結果として、国語文法、英語文法、メタ文法のいずれも、事後テストが、事前テストより有意に点数が高いことが示された（秋田他2013）。従って、デザイン授業によって、ことばの仕組みや働きへの意識が高まったと考えられる。また、事前・事後課題テストの国語文法、英語文法、メタ文法問題、これら三つ相互の間には弱い相関が見られた。つまり、言語の仕組みに対する意識を高めることで、国語文法能力や英文法能力の向上を促進する可能性があることが示唆された（同上）。事前・事後テストを問題項目別に分析した結果の中から、特に注目すべきことは、事前テストにおいて、国語文法問題や英文法問題が学年が上がるにつれ得点が伸びているのに対し、メタ文法問題は学年別の得点に有意差が見られなかったことである。さらに、意図的にことばの仕組みに気づくデザイン授業を行った事後テストにおいて、メタ文法問題の得点が伸びている。この結果から、意図的にことばの仕組みに気づく活動が組み込まれないと、メタ文法能力が育たないことが窺える。この事前・事後テストの結果は、言語横断的なことばの仕組みに対する気づきを促す授業が有効であることを示している。

2.2.2 数回の実践でことばへの気づきへの意識を高める

言語力の発達段階に基づき、ことばの仕組みや働きへの気づきを促す授業が継続的に行うことが言語能力の育成に望ましいが、上記のメタ文法能力育成プロジェクトの実践により、2回のデザイン授業を実施したことで、ことばへの気づきへの意識が高まったことが明らかとなった。ことばの仕組みや働きへの気づきを促す授業を実施することは、決して普段の授業や年間カリキュラムに抵抗することではない。また、必ずしも全校レベルで学期や年間カリキュラムに計画的に組み入れる必要はないと考える。

実践授業を実施する際、授業担当者の問題意識に合わせ、可能な範囲で授業に取り入れていくことができる。例えば国語科・英語科それぞれの時間割から1学期につき1、2コマを計画することや、国語と英語を扱う教材を用いて一時間の言語活動を行うことなどが考えられる。普段の一コマの授業、あるいは授業中の数十分の時間の中で、ことばへの気づきを引き出す要素を組み入れる程度でも、ことばの仕組みや働きを意識させることにより、学習者のメタ言語能力の発達を促すことが期待で

きる。言語力の観点から、個別の言語を超えたすべての言語が共通することばの構造や仕組みについて意識させたり、考えさせたりすることは、言語の規則基盤学習とつながり、メタ言語能力の促進へとつながる。それにより、母語の理解を深めることや、外国語を学ぶ際の足がかりとなることが期待できる。

2.2.3 ことばへの気づきが学習者の潜在的に多様な学びを導く

ことばへの気づきを促す授業の効果の検証は、上記の事前・事後テストによる量的分析だけではなく、デザイン授業実施後の学習者の感想記述を対象にした質的分析によっても行われている。上記2回のデザイン授業に引き続き、英文と古文における助詞・助動詞の時制(テンス)と相(アスペクト)の表現方法を比較し漢文の書き下し方法について理解するデザイン授業が高校2年生の国語科2クラスのそれぞれで2回に亘って行われた(2013年12月実施)。2クラスの生徒59名の自由記述の感想内容を秋田他(2013)に基づき、言語関心、文法関心、運用、問題解法、授業方法、その他の6つの項目にカテゴリー分類した。

その結果、言語関心を示す感想が一番多く見られた。言語関心を示す感想とは、個別文法項目を超えた言語やことばそのものに対する関心や比較に言及した感想である。ことばの複雑さ、言語間の意味のずれ、日本語と英語、漢文、古文の言語比較や言語学習への動機づけに関する言及などが含まれる。言語関心に言及した感想では、言語を単純比較した感想から、さまざまな視点からことばを捉え直しことばの面白さや母語の重要性に気づいた感想まで、多様な関心や多様な理解の程度を表す記述が見られた(秋田他2015)。学習者がことばの仕組みに対し様々な観点からそれぞれの関心を持ち、既有知識と体験とを照らし合わせながら、自分なりの理解に至ったと考えられる。つまり、ことばへの気づきを意識したデザイン授業は、学習者に潜在的多様な言語学習の機会を与えたと言える。

3. ことばへの気づきの観点から小学校外国語教育への提案

国語教育と外国語教育が連携した先行研究を踏まえ、本節では、小学校外国語教育において、ことばの気づきを促す国語・英語・中国語の連携を図った授業を提案する。ことばへの気づきを促す授業は、メタ言語能力を活性化させる学習活動を授業に意識的に取り入れていく試みである。ここで述べるメタ言語能力を活性化させる学習活動は、メタ言語能力の要素である音韻への気づき、単語への気づき、文法への気づき、運用上への気づきといった四領域に基づき、言語間の比較を通して、学習者に考えさせたり、意識させたりする言語活動を指す。

3.1 英語一辺倒の外国語教育から複言語主義へ転換する必要性

ことばの気づきを促す国語・英語・中国語が連携した

授業を提案するが、それは中国語に限定することではなく、英語の代わりにあるいは英語のほかに第三言語や第二外国語を学校教育に導入する必要性を訴えることを目的とするものである。つまり、英語一辺倒の外国語教育から複言語主義へ転換することの必要性を提示したい。実は、史料によると、日本は多様な言語や異文化と交わった時期があった。江利川（2017）は、歴史的な観点から日本がなぜ多様な外国語教育から英学本位制になったかを検討した。その理由として、政治的、イデオロギー的な要素や教育予算の低さなどが挙げられた。グローバル化が謳われる現代、英語だけを推進する外国語政策には納得しがたく、複言語を学校教育に導入するべきであると考えている。例えば、同じく東アジア地域に属する国として、中国や韓国が日本と歴史的かつ文化的に緊密につながっているだけではなく、在日する人口も少なくない。日本国内において、中国語や韓国語資源へのアクセスがしやすく、素早い応用ができる点は、言語学習の重要な要素である有用感を高める。また、多言語・多文化共生を推進する地域においては、地域の特色である異文化の特徴を生かし、異言語コミュニティが有する資源を活用する工夫が期待できる。

次期学習指導要領には、複言語主義の理念に基づいたCEFR（欧州言語共通参照枠）の特徴が明記されている。しかし、複言語主義の特徴ある取り組みを英語教育だけに導入している点において、国の政策は矛盾している。それは、「できるようにする」というCAN-DOリストと、四技能に「やりとり」を加えた五つの領域である。Can Doは、CEFRでは評価の基準として使われるが、日本では到達目標として位置づけられている。鳥飼(2017)は、CAN-DOリストが誤って使われている問題点を指摘し、評価基準を到達目標として使ってはいけない理由を述べた。到達目標は、教育の目的に従って決めるものであり、目標達成できたかを評価するためにCan Doリストを作るのは本末転倒となり、教育が歪んでしまう危険性がある。

本来CEFRは、複数の言語の学習を促進する複言語主義を実現するために策定された。複言語主義は、言語の多様性を守り、他者の言語や異文化を学ぶことによって、相互理解を図るコミュニケーション能力を作り出すことを目的としている。便宜上CEFRの一部の取り組みだけを導入し、本当に大事にされている複言語主義の言語教育理念を捨象することは見直すべきである。学習指導要領に明記されている「外国語」という名前を尊重し、英語という特定の言語に偏らないよう広く世界の言語を見据える配慮が必要となる。

3.2 国語・英語・中国語が連携する授業の可能性

先述のように、中国語に限らず、韓国語やポルトガル語など多言語を国語と外国語の授業に取り入れることも可能であるが、ここでは、複数言語のひとつの例として、中国語を取り上げて論じる。中国語を授業に取り入れよ

うとすると、教員養成や研修体制が不十分ではないかと思われがちだが、実に、英語教員の多くは、必修選択科目として第二外国語を大学で学習した経験がある。その中で、第二外国語に中国語を選んだ人数は少なくない。また、国語教員の中にも、中国語を教える免許を持つ人がいる。今後これらの教員が率先し、三つの言語力を生かし、言語間の比較を通じながら、ことばへの気づきを促す授業を実践することが期待できるだろう。

小学校外国語教育の目標は、外国語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することである（文部科学省2017）。この基礎となる資質・能力の育成は、メタ言語能力を養うことによって実現できる。メタ言語能力の発達を促進するには、ことばへの気づきを意識した国語と外国語の連携が必要となる。小学校段階では、ことばへの気づきを意識的に授業に取り入れようとする教員に高度な外国語力を求める必要がなく、複数の言語を比較し相互に関連づけさせることに指導の重点が置かれる。

国語・英語・中国語が連携する授業の実施形態として、三つが考えられる。まず、国語の授業において、日本語を英語や中国語あるいは両方と比較させ、ことばへの気づきを喚起する学習活動を組むことができるだろう。また、外国語の授業において、英語や中国語を日本語の特徴と関連させ、二言語間あるいは三言語間の比較を通じ、ことばの仕組みや働きを考えさせる活動を取り入れることも考えられる。さらには、総合的学習の時間に「ことば」をテーマにする授業を設定し、国語・英語・中国語の三言語あるいは、そのうちの二言語を対象にし、それぞれのことばの特徴や共通するポイントを発見させる学習活動をデザインすることもできるだろう。

3.3 小学校国語教科書における英語・中国語教育と結びつける題材

小学校の段階で国語と英語が連携する授業の実践について、森山（2009）は、国語からはじめる外国語活動を紹介した。生越（2006、2007）は、メタ言語能力を育てる観点から小学校国語教育を考察し、国語教育と英語教育の連携を期し、メタ言語能力の開発を検討した。そのほか、東條（2015）は、漢字の成り立ちに着目し小学校外国語活動における教室談話分析を通じ、英語活動と漢字指導に関する連携の可能性を描写した。また、英語教育と結びつけたメタ言語能力の育成につながる教材の提案として、藤森（2015）は、小学校国語教科書から、日本語の構造を意識的に扱う箇所を取り上げ、「統語」、「活用」、「ことば遊び」、「多言語」の四つに分類した。ここでは、小学校国語教科書（光村図書）に基づき、特に中国語と関連づけられる題材を抜き出し、メタ文法能力の四領域に従って分類する。分類した結果が表1である。

音韻への気づきとは、頭韻や脚韻への気づき、音素の結合や代替、韻をふんだことば遊びなどが理解できるこ

表1：中国語と関連づけられる活動

巻	頁	タイトル	内容	分類
1年上	40 76 112	文を作ろう 「は」を「へ」を使おう カタカナを見つけよう	主語と動詞 主語、目的語、動詞 カタカナ英語	文法への気づき 文法への気づき 単語への気づき
1年下	22 36 72 88 102	漢字の話 カタカナを書こう カタカナの形 ことばを楽しもう 似ている漢字	象形文字 カタカナ英語 カタカナ英語 言語遊び 漢字の形	単語への気づき 単語への気づき 単語への気づき 音韻への気づき 単語への気づき
2年上	48 102	同じ部分を持つ漢字 ことば遊びをしよう	漢字の構成 頭韻で始まる文づくり	単語への気づき 音韻への気づき
2年下	21 23 34 52 74 117	主語と述語 漢字の読み方 カタカナで書くことば 似た・反対意味のことば 様子を表すことば ことばを楽しもう	何（誰）はなんだ（どうする） 一つの漢字で多様な読み方 擬音・外来 同義・反対語 擬音・擬態・たとえ・修飾 回文	文法への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 言語への気づき 運用への気づき 音韻への気づき
3年上	28 40 51 116 122	漢字の音と訓 ことばで遊ぼう 俳句を楽しもう へんとつくり ローマ字	音読み、訓読み しゃれ、回文、アナグラム 5・7・5の17音 漢字の構成 ローマ字表記	音韻への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 単語への気づき
3年下	26 44 46 68 94 96	修飾語 短歌を楽しもう 漢字の意味 ことばを分類する 音訓かるた ことわざについて調べよう	何をだれにどこでどんな 5・7・5・7・7の31音 同じ発音で違う漢字 物事、様子、動き 音読みと訓読みの歌作り もの、表現、意味	文法への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 文法への気づき 音韻への気づき 運用への気づき
4年上	8 26 52 64 106	ばらばらことばを聞き取る 漢字の組み立て 短歌・俳句に親しもう いろいろな意味をもつことば 漢字しりとり	音の聞き取り 漢字の構成 短歌・俳句 同じかなで多様な意味 脚韻で始まる漢字	音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき
4年下	32 48 64 92 102	慣用句 短歌・俳句に親しもう 文と文をつなぐことば 熟語の意味 間違えやすい漢字	馬が合う 短歌・俳句 つなぎことばの働き 漢字の組み合わせ同じひらがなで 違う漢字	運用への気づき 音韻への気づき 文法への気づき 単語への気づき 単語への気づき
5年	42 56 68 96 98 102 112 154 156 170 174 176 195 223	漢字の成り立ち 古典の世界 敬語 暗号解説 日常を十七音で 和語・漢語・外来語 漢字の読み方と使い方 同じ読み方の漢字 文の組み立て 古典の世界 分かりやすい文をつくろう 詩の楽しみ方を見つけよう 複合語 方言と共通語	象形文字 古典文章 尊敬語、謙譲語 記号の音に合う漢字 俳句を作ろう それぞれの由来 多音字 厚い熱い暑い 二つの主語、述語、修飾 論語、漢詩 主語と述語を対応させる 詩の種類、特徴 複合語の種類、特徴 日本言語地図	単語への気づき 運用への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき 文法への気づき 運用への気づき 運用への気づき 単語への気づき 運用への気づき
6年	52 86 106 151 168	漢字の形と音・意味 熟語の成り立ち 生活の中のことば 漢字を正しく使えるように 日本で使う文字	同じ部分で同じ音・意味 熟語の構造・構成 敬語、世代間ことばの違い 同訓異字、音読みの場合 仮名の由来、万葉仮名、日本語の表記、ローマ字との関わり	単語への気づき 単語への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 運用への気づき

とを指す。一年生から六年生まで音韻への気づき分類が学年ごとに配置されている。音韻への気づきは概ね二つの種類に分けられる。一つは、韻を生かすことば遊び(10箇所)、もう一つは、音読みや訓読みといった漢字の読み方(7箇所)である。韻を生かすことば遊びについては、しゃれ、回文、しりとり、短歌や俳句を鑑賞したり、創作したりする活動が組まれる。これらの活動に似た中国語のことば遊びを加え、日本語特有の音韻を楽しむながら、各言語の発音の特徴と豊かさを認識できる。漢字の読み方については、中国語の発音と同じ音読みの漢字をいくつか提示し、その関連性に気づかせる。中国語と日本語の両方に存在する同音字(同じ読み方で違う漢字)や多音字(同じ漢字で違う読み方)を選び、言語としての共通性や違いを考えさせる。このような活動により、音韻に対する識別力が高められ、読解力の発達に繋がるのが考えられる。

単語への気づきとは、文の構成要素である単語を理解する能力を示す。単語に関連する内容の多くは、漢字自体の構成や漢字間の組み合わせである。漢字は、中国語から伝わったものであり、現在、日本語と中国語しか使われていない文字である。この意味で、漢字に関わる項目は中国語と非常に結び付けやすい。むしろ、中国語と結びつけたほうが、漢字の理解を深めることや、後続する漢文の学習や中国語を学ぶ素地を養うことが期待できる。特に複合語と熟語の構造は文や節を構成する重要な要素であり、高度な中国語や日本語能力の育成に欠かせない。二つの言語を例示して対比させることで、共通点を見出す活動が学習者に文構成を深く考える機会を与える。漢字と違い、日本語独自のカタカナ英語を紹介する内容も見られた。漢字とカタカナ語が共存することが日本語の大きな特徴の一つであることを学習者に気づかせるものである。

文法への気づきとは、言語の正確性や正当性を判断する力のことを指す。語形や語順だけでなく、品詞など文法構造への気づきも指す。主語や述語を認識する力、品詞を分けて構造的に認識する力が含まれる。一年生から五年生にかけて、7か所の文法への気づきが主語、述語、修飾語に集中している。語順や係り受け修飾関係も関連している。文型のパターンと対応させながら、英語や中国語がSVO型、日本語や韓国語がSOV型、他の組み合わせ(VSO、OSV)で他の言語も存在することを説明し、複数の言語の語順の違いに気づかせる。これにより、個別言語を超えた言語が共通する文法の枠組を学習者に与えることができる。SVOの代わりに、主語や動詞、目的語など学習者の理解度に相応することばで例文を提示しながら説明することが望ましい。係り受け修飾

関係は、小学校以降に学ぶ長文の基礎を築く文法項目の一つと言える。6年生の教科書に文法への気づきに分類できる項目は見受けられないが、小学校高学年においても語・句・節レベルの係り受け修飾関係を意識させる活動を取り入れることが望ましい。

運用への気づきとは、状況に応じ言語を適切に活用する力、円滑なコミュニケーションができる能力を指す。小学校の国語教科書に現れた運用への気づきは、三通りある。まず、相手によって敬語や世代間のことばを選び発信することの重要性、日本で使う文字の使い分けを意識させることが、言語使用の状況に対する気づきである。中国語で使われる丁寧語を紹介し、言語間で共通することばの普遍性に気づかせる。そして、物事を豊かに表現するには、ことわざ、慣用語、擬音語・擬態語・比喩を用いることができる。同じ現象に対し、それぞれの言語に似ている表現や異なる表現があり、それに気づかせることにより、言語がもつ社会文化性の多様性を知ることができる。文学の性質を有する詩・古典・論語・漢詩は運用への気づき領域に分類した。その理由は、文学が高度な言語運用能力を資するからである。これらの文学作品を鑑賞することによって、それぞれのことばが表す世界とそのことばの奥深さに気づかせる。

4. まとめ

本稿では、小学校外国語教育の性質を「ことばの教育」として捉え、複言語主義の視点を取り入れ、ことばへの気づきを意識した国語・英語・中国語が連携する授業の可能性を探ってみた。「ことばの教育」とは、ことばの面白さや豊かさ、不思議さに気づかせ、ことばへの気づきを大切にしたい言語能力の育成である。小学校においては、母語や外国語を対象にことばへの気づきを培い、言語に対して意識的になることで、母語と外国語の効果的な運用を可能にすることが期待される。「ことばの教育」を実現するためには、国語教育と外国語教育の連携が必要となる。筆者が3年間に渡り携わった中等教育における国語科と英語科連携のプロジェクトの実践から、小学校の外国語教育に示唆を与える研究結果を紹介した。その結果に基づき、小学校外国語教育において、ことばの気づきを促す国語・英語・中国語を連携する授業を提案することに試みた。今後、この提案の実践に向け、具体的な指導案を計画し吟味していきたい。

謝辞

原稿を注意深くお読み頂き適切な助言を頂いたことに対して、査読者および編集委員に感謝する。本研究は、研究活動スタート支援科研費(課題番号17H06715)の助成を受けたものである。

引用文献

- 岡倉由三郎 (1894) 「外国語教授新論」『教育時論』 pp.338-340. 開発社
- 岡田伸夫 (1998) 「言語理論と言語教育」大津由紀雄他『岩波講座言語の科学 第11巻 言語科学と関連領域』 pp.130-178. 岩波書店
- 江利川春雄 (2017) 「日本はどうして英語一辺倒主義になってしまったのか」鳥飼玖美子 大津由紀雄 江利川春雄 斎藤兆史『英語だけの外国語教育は失敗する』 pp.29-50. ひつじ書房
- 斎藤兆史・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき (2014) 「メタ文法カリキュラムの開発：中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの試み」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 53 : pp.255-272.
- 斎藤兆史・濱田秀行・榎木貴之・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒 (2013) 「メタ文法能力の育成から見る中等教育段階での文法指導の展望と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 52 : pp.467-478.
- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林峰・三瓶ゆき (2014) 「文法学習に関わる要因の教科横断的検討—文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第53巻: pp.173-180
- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき・大井和彦 (2015) 「メタ文法能力育成をめざしたカリキュラム開発—実践と教材開発を通じたメタ文法カリキュラムの展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 54 : pp.355-388.
- 秋田喜代美・藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・榎木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子 (2013) 「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第52巻: pp.337-366
- 森山卓郎 (編著) (2009) 『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会
- 生越秀子 (2006) 「初等言語教育におけるメタ言語能力開発についての一考察—国語教育と英語教育の連携を期して」『青山国際コミュニケーション研究』 第10号: pp.61-91
- 生越秀子 (2007) 「メタ言語能力を育てる小学校国語教育についての一考察」—「伝えあう力」育成を視座に—『全国大学国語教育学会発表要旨集』 112: pp.12-16
- 西尾実・石橋幸太郎監修 (1967) 『言語教育学叢書』 (全6巻)、文化評論出版
- 大津由紀雄 (1982) 「言語心理学と英語教育」『英語教育』 31(7): pp.28-31
- 大津由紀雄 (1989) 「メタ言語能力の発達と言語教育—言語心理学からみたことばの教育」『言語』 18(10): pp.26-34 大修館書店
- 大津由紀雄 (2004) 「公立小学校での英語教育—必要性なし、益なし、害あり、よって廃すべし」大津由紀雄編著『小学校での英語教育は必要か』 pp.45-80. 慶應義塾大学出版会
- 大津由紀雄 (2005) 「小学校での言語教育—『英語教育』を廃したあとに」大津由紀雄編著『小学校での英語教育は必要ない!』 pp.141-160. 慶應義塾大学出版会
- 大津由紀雄 (2006) 「原理なき英語教育からの脱却を目指して—言語教育の提唱」大津由紀雄編著『日本の英語教育に必要なこと』 pp.17-32. 慶應義塾大学出版会
- 大津由紀雄 (2010) 「言語教育の構想」田尻英三・大津由紀雄編『言語政策を問う!』 pp.1-31. ひつじ書房
- 大津由紀雄 (2012) 「日本語への『気づき』を利用した学習英文法」大津由紀雄編著『学習英文法を見直したい』 pp.176-192. 研究社
- 大津由紀雄 (2014) 「「ことば」という視点—英語教育に決定的に欠けているもの—」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afielddfile/2014/05/14/1347389_03_1.pdf (2017.3.31参照)
- 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afielddfile/2016/12/27/1380731_00.pdf (2017.7.1参照)
- 鳥飼玖美子 (2017) 「復言語主義とCEFR、そしてCan Do」鳥飼玖美子 大津由紀雄 江利川春雄 斎藤兆史『英語だけの外国語教育は失敗する』 pp.1-26. ひつじ書房
- 東條弘子 (2015) 「小学校外国語活動における教室談話分析—漢字の成り立ちに着目して—」『自律した学習者を育てる英語教育の探究7研究報告』 No.83 : pp.41-50
- 藤森千尋 (2015) 「小学校における「ことばの教育」としての国語教育と英語教育の連携の可能性」『自律した学習者を育てる英語教育の探究7研究報告』 No.83 : pp.19-40
- 文部科学省 (2007) 言語力の育成方策について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/07081717/003/001.pdf (2017年8月8日参照)
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afielddfile/2017/03/31/1383995_3_1.pdf (2017.3.31参照)
- 榎木貴之 (2012) 「国語教育と英語教育の連携史—1970年代・英語教育雑誌における議論を中心に—」『言語情報科学』 (10) : pp.125-141. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- 榎木貴之 (2015) 「国語教育と英語教育の連携前史—1901年から戦前までを対象に—」『言語情報科学』 (13) : pp.67-84. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科

学専攻
榎木貴之 (2016a) 「国語教育と英語教育の連携前史—戦後から1960年代までを対象に」『言語情報科学』(14): pp.71-87. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
榎木貴之 (2016b) 「国語教育と英語教育の連携前史—岡倉由三郎の『連絡』の提言を中心に」『国語科教育

研究 第131回東京大会研究発表要旨集』 pp.385-388. 全国大学国語教育学会
Tunmer, W. E. and Bowey, J. A. (1984) "Metalinguistic Awareness and Reading Acquisition." in Tunmer, W. E., Pratt, C. and Herriman, M. L. (eds.) (1984) *Metalinguistic Awareness in Children: theory, research, and implications*. Berlin: Springer-Verlag.

The Possibility of Collaboration among Japanese, English and Chinese in Foreign Language Education in Elementary School: from the Perspective of Language Awareness

WANG Linfeng

This paper holds that the purpose of foreign language education in elementary school is "language education". Language education aims to cultivate language competency in prospect of language awareness. Both native and foreign language competency can be developed by raising one's linguistic awareness. A fulfilling language education thus calls for collaboration between Japanese education and foreign language education approaches. This paper provides results drawn from an action research project of collaborative Japanese and English classes in secondary school, to shed some light on elementary school foreign language education. Based on a Japanese language textbook analysis, the possibility of collaboration between Japanese with Chinese is discussed.

Key words : Foreign Language Education in Elementary Schools, Metalinguistic Ability, Language Noticing/Awareness, Language Education